

節談説教の談話構造分析

A Discourse Analysis of the *Fushidan* Preaching

角 岡 賢 一
KADOOKA Ken-Ichi

ABSTRACT:

In this paper, the focus will be put on the Jodo-shinshu practice of preaching method of the *Fushidan*. The Buddhism way of preaching has been the long tradition on the one hand, and the origin of all the narrative arts such as Rakugo, Kodan, Manzai, Sekkyo-bushi and Gidayu-bushi. The narrative structure of the Buddhism preaching has been quite systematic in that the paragraphic structure is established: the Introduction of the doctrine - the Description - the Metaphor - the Affinity - the Conclusion. Another characteristic of the *Fushidan* preaching is the melodic narration, which is inherited to Gidayu-bushi among others. The mental feature of the *Fushidan* preaching is the religious ethos of the Buddhism tradition.

KEYWORDS:

〔節談〕 the *Fushidan* ・ 〔説教〕 preaching ・ 〔五段法〕 five-part structure
〔談話構造〕 narrative structure

1. はじめに

この小論は浄土真宗に特有の説教である節談を対象とした考察である。内容は、節談の五段法について言語学的に分析しようとする試みである。一般的に節談は聴聞衆の情に訴えかける情緒的な説教であると認識されている面が大きいかもしれないが、この小論では節談の構成が論理的であるという点を強調しておきたい。

以下の節において示すのは、次のような項目である。

- ・ 節談は論理的な構成によって成り立っていること
- ・ 讃題と法説は経典や祖録から引用するので説教者の学びによるが、譬喩と因縁は説教者が日常に経験したことから創意工夫によって考え出すものである
- ・ 四百年前に安楽庵策伝和尚が『醒睡笑』を編んだときは譬喩はごくごく短い一口話が主体であった。それが徐々に長くなっていったのではないか
- ・ 『親鸞聖人御一代記』『石山戦記』というような続き読みをされる長尺ものは、因縁に相当する部分が長くなっていったと考えられる

以下の議論では、主としてこの四点を検証していく。

節談の研究は、十年前に節談説教研究会が結成されて雑誌『節談説教』が年に二回発行され

ている。これによって、節談の研究は大きく進んだ。浄土真宗は聞法を奨励してきたという経緯があって節談は往時、隆盛を極めた。幕末の文化年間に播磨国揖保郡東保の福専寺に獲麟寮が設けられ、説教の名人が陸続と輩出した。また明治以降に説教本は一千二百種類以上が出版された。これは即ち、理論と実践という両面が相携えて歴史を築いてきたのである。ここ十年で節談研究会が歩んできたのは、このような理論と実践の橋渡しであって実りある経緯を辿ってきたと言える。この小論は、そのような歩みの一端を紹介する試みでもある。

2. 節談の五段構成

本節では、節談の談話構造について言語学的見地から考察を行う。

浄土真宗に伝わった節談は中世期から他宗派の説教における形式などを受け継いでいる。大須賀師（2014）を始めとして、多くの書ではには安居院流伝持の節談構成として「讃題・法説・譬喩・因縁・結勸^{*1}」という五段法が示されている。このように明確に確立された形式が整っているということは、節談が体系的に成り立ったという経緯を示していると言えよう。このように構成が明確であれば、新しく説教を考案する際においても大いに助けになることであろう。この五段法は浄土宗や浄土真宗にもそのまま伝わっている。

大須賀師（2014／1910）『説教の秘訣』は書名の通り節談の要諦について微に入り細を穿って解説を施してある。その第三章「組織法」についての説明で、三分式・四部式・五段法を採り上げている。三分式は序論・本論・結論という一般的な三区分の名称が、それぞれ序分・正宗分・流通分となる。四部式においては正宗分が主と事に分けられ、序分は「序」、流通分は「結」という名称になっている。順序通りに並べると、序－主－事－結となる。上に示した「讃題・法説・譬喩・因縁・結弁」という節談の五段法では、正宗分の「事」が更に譬喩と因縁に分けられる。つまり、序論と結論は、三分式・四部式・五段法のいずれにおいても独立して区別されている。本論についてのみ、四部式では二分され、五段法では三分割されているのである。分割が細くなるほど構成は精緻になり、なおかつ一席の説教も長くなるのは必然である。いずれにしても、三分式・四部式・五段法がそれぞれ極めて論理的な構成に基づいているという点で共通している。以下、同書に基づいて五段法の構成を追うてみる。

【讃題と序分】

大須賀師（2014：96）では、讃題について「經典・祖録の中より仏祖の金言を讃題として、「自分が話すことは、自分一人の私見ではなく、仏祖の言葉を宣伝するものである」と明らかにするためである」と述べられている。大凡説教そのものは讃題を出発点とし、そこから教義を説き起こすものである。物に喩えるならば、差し詰め扇の要であろう。説教一席がどれだけの法果をもたらすか、半分は讃題に依るのではなからうか。而して、残る半分は譬喩と因縁をどのように組み立てるかにかかっているのではなからうか。

讃題に続くのは、「序分」として聴聞衆の注意を惹くと説かれている（上掲書84～85頁）。その弁じ方は、文章の起法八則を応用して次のようになるという。

- 一. 叙事 事実を述べて話し始める
- 二. 頌聖 聖者の言葉を引く
- 三. 問答 聴聞衆に問いを発する

- 四. 原本 道理や事実の根本を尋ねる
- 五. 破題 古語あるいは諺を引く
- 六. 設事 仮に事実を設定して話し始める
- 七. 叙情 真情を吐露して話し始める
- 八. 歌誦 歌を引いて話し始める

このように実に多様であり、一席の流れとして論理にも適っていると言えよう。「序分」として讃題に続けて語るといことは、節付きの詠唱調から普通の語り口に戻るということである。言わば、説教者の「素」が出るということになる。節付きで語られる讃題そのものは、儀式的で殊更厳肅である。しかも詞は經典や親鸞聖人に始まる歴代門主の言葉であるから、まさに説教者が「お取り次ぎ」をするのである。そこから素語りに入るのであるから、呼吸が難しいであろう事は容易に想像できる。讃題に対しては聴聞衆から受け念仏が沸き起こるであろうから、それが納まって一段落するのを待たねばならない。ここで段取りを間違えたりすると、一席は取り返しが付かなくなるであろう。

これらを仮に「起法八則」による分類として、以下で言及する。これらは序分を話題によって分類したものである。大きく分けて説教者自身や聴聞衆の個人的な事柄にも関わる話題（三・四・六・七）と、引用（二・五・八）に分類することは可能であろう。第一「事実を述べる」というのは、具体的な内容が不明な限りは分類できない。

続けて、もう一つの下位分類として以下の三つが示されている（上掲書、86頁）。

- 来意的 何故この讃題を選んだか
- 談話的 説教開席に至った事情など
- 平叙的 讃題の意味を簡単に述べて正宗分に入る

この三区分と、上掲の起法八則には部分的に重なる所があるように思われる。例えば「来意的」に讃題を選んだ理由を述べるのは、起法八則第七「叙情」の「真情を吐露する」にも該当すると思われる。この三区分と起法八則が重複しているのは、両方とも内容による分類であることによる。

【法説】

讃題に続いて法説に入る。大須賀師（2014：190）によると、法説とは次のように定義されている。

法説とは、讃題の典拠と字句の説明をいう。讃題は聖教の一節をそのまま称えているので、よほど聖教に通じている者でなければ、それを聞いただけで意味を理解できるものではない。そこで讃題の意味を解りやすくするために、その中で用いられている字句を説明することが要求されるのだ。ここでは聴聞者に知識として理解させるのであり、いかにわかりやすく説明できるかで、説教者の力量がはかられるといえよう。

このように法説の定義として、懇切丁寧に過不足なく説明されている。讃題では經典や祖録の難しい言葉遣いのままであるから、これを現代の話し言葉に置き換えて聴聞衆に理解できるよ

うに説かねばならない。莊重に節を付けて詠唱する讃題から、平易な言葉による法説へと段階を追っていく展開は合理的であり、まずは説教一席の理念を提示する所である。続いて譬喩と因縁に至って、この理を身近な譬えに引き寄せて聴聞者の情に訴えかけるように構成が組み立てられているのが節談の特徴であると言えよう。

大須賀師（2014：87以降）は、法説の組み立て方に次の三格があると挙げている。

- 一．綱領一段格 法説の第一段で大主意を述べる。おそらく最も分かり易い形であろう
- 二．鶴膝格 大主意を第二段に置く
- 三．曲折格 初めに譬喩因縁を置き、大主意は第三段に持ってくる

以上のように、正宗分のどこに大主意を置くかによって分類している。五段法においては法説－譬喩－因縁と順序が決まっているので、これに忠実に従えば綱領一段格で法説を始めに置くのが標準的ということになる。正宗分の最初で法説に相当する大主意を説き、その後に譬喩と因縁を配するのである。ところが、鶴膝格と曲折格ではその順序が入れ替わっている。特に鶴膝格は、譬喩と因縁の間に法説を挟むという変則的な構成である。名称からして、鶴の膝というのは中間が太いので、譬喩と因縁の間に法説を配するという構成を名付けたものであろう。譬喩因縁譚の種類や説教者の意図によってこのような順序にするのも、効果を上げる場合もあるであろう。大主意を後ろに配する曲折格というのも、名前の通りに変則的であるという含みがあるように思われる。

【譬喩】

讃題と法説が「理」であるとすれば、譬喩と因縁は聴聞者の情に訴えかける例え話である。大須賀師（2014：191頁以降）では、譬喩の定義を次のように示されている。

法説で説いた讃題の意味を、もっとわかりやすく説明するために、聴聞者の納得のいく譬え話をするをいう。ここでは理詰めでわからせることが大事である。そのためには聴聞者にとって荒唐無稽な話より、実生活に即した話が理解しやすいので、できるだけ自己の実体験から得た話が望ましい。

ここで「実生活に即した」というのは、聴聞者にとって身近であり「そうだ、そうだ、そういうことはよくある」と納得してもらえそうな類いであればならない。譬喩は讃題と法説に関連した話題でなければならない、その意味で理詰めであって「荒唐無稽であってはならない」と戒めているものであろう。

讃題と法説は経典や祖録で学ばねばならないが、譬喩と因縁は上述のように「自己の実体験から得た話が望ましい」という考え方もある。説教者としては、常日頃から譬喩の題材になりそうな材料を多数集めておく必要があろう。黒瀬師（2016）のように譬喩の材料になりそうな小話を集めた本も参考になるであろう。

譬喩については、第三節でより詳細に検証することにする。

【因縁】

因縁の定義について、同じく大須賀師（2014：193）から引用する。

因縁談とは、阿弥陀如来の本願が人間世界に展開している姿をいうのであって、それは弥陀のはたらきを我が身に受け止めて、御念仏を喜ぶ因となるものでなければならない。そして前段の譬喩までが、聴聞者の頭に訴えて理解させることを主眼としていたのに対し、ここでは聴聞者の情念に訴えて感動を与えることを主眼とする。

この説によると譬喩と因縁は重きを置くのが理と情とであって、本質は異なると述べている。譬喩が、讃題と法説が説く教義を補完するという意味では理詰めである。他方で譬喩と因縁の共通点は、説教者の創意によって工夫された話題を提供するという点であろう。

譬喩に比べて、因縁は長い物語になる。因縁談は説教者が自らの経験に基づいて創作するのが基本であると説かれているが、第四節で紹介するように『観無量寿経』において韋提希夫人が釈尊に救いを求める逸話や『法華経』「信解品第四」の「長者窮子の譬喩」などは、經典から題材を取って因縁譚としても頗る興味深い筋書きを備えている。説教者の語りによって、因縁譚として活用することも意義があるであろう。

【結勸】

大須賀師（2014：202以降）によると、結勸は合法とセリ弁という二つに分けることができるという。それぞれの定義を次に引用する。

合法とは、因縁談を主題となる御法義に照らして味わうことである。言い換えるなら、因縁談で弥陀の本願が人間世界に展開した姿を話した後、それが他人のことではなく、説教者も聴聞者も、おのおの自分の問題として受け止めて味わうのである。

セリ弁は、最後に信心を喚起するために、聴聞者の感性に訴え、心を共鳴させようと、七五調で、御法義の有り難さを歌い上げるものである。

合法が讃題・法説と因縁の関係を理で説くのに対して、セリ弁は名調子で聴聞衆に感銘を残そうという方向である。この二つは二者択一ではなく、例えば合法に続けてセリ弁を置くというような工夫も可能である。但し併用する場合は、必ず合法を先に置いてセリ弁を後に廻すべきであろう。セリ弁は七五調の名調子で話芸の色彩を帯びるため、順序を逆にするとその効果が損なわれるからである。上掲書に挙げられている「正則の台本作成法」という見本には、北面の武士佐藤義清即ち西行法師の出家を因縁として、讃題に立ち返って合法を説いた後に近江八景を詠み込んだセリ弁を加えている。

結勸は、序論－本論－結論という構成に当てはめると結論に相当する。従って、説教一席で最も重要な部分であるとも言える。讃題に立ち戻って、一席を締め括らねばならない。一席が讃題に基づいて組み立てられてきたことを示さねばならない。また長い因縁談を用意した場合は特に、簡にして要である必要がある。

ここで実際に口演された節談を辿ることによって、五段法の構成を見ておきたい。直林師（2014）には神田唯憲師（明治三十二（1899）生、昭和五十九（1984）寂）が1955年に姫路の本徳寺で録音した節談が二席収録されている。【前席】と【後席】に分かれている。それぞれの構成は次のように解説が付けられている（同書111～112頁）*2。

- 【前席】 讃題 五濁悪世のわれらこそ 二首
 法説 (一) 本願正所被の義
 (二) 唯信正因の義
 (三) 心光照護のご利益
 聴聞の所詮
 『安心決定鈔』の文
 譬喩 『法華経』の結びを詠んだ和歌
 因縁 老夫婦の聴聞の話 (土産待つ老人)
 結勧 ようこそ信じた妙好人の弁
- 【後席】 和歌 いやがるを袖ひきとめての歌
 譬喩 行水三千里の詩 (切ない親心)
 法説 「疑えば迷うぞよ」
 因縁 河内の忠兵衛夫婦の疑問
 譬喩 皿に残る移り香 (煩惱と定散心)
 弁 「沖のカモメ」の弁
 譬喩 川の深さを訪ねる旅人 (弥陀成仏の意味)
 結勧 「たとい天は地となり」の弁

前席は、讃題から結勧に至るまで定法通りの五段構成である。讃題は七・五が四句連なる和讃二首、続く法説はご開山聖人の思し召し三つとしてその意を解説している。譬喩は法華経終巻の「歡喜信受作礼而去」という御文の和歌で、因縁は「土産待つ老人」という話で前席の半分を占めるほどの長さである。前席全体の構成から見て、この因縁談に一席の比重を置いている意図が窺える。即ち、いつも説教を聴聞に出かける夫に替わって初めて説教を耳にした老婆であるが、土産話にどのような説教を聞いたかを語る事が出来ない。五日間連続して聴聞しても、家に帰ると話を忘れてしまい土産話ができない。それを苦にして家を出ようとまで決意した時に仏壇で一人語りに「こんな情けない婆でも見捨てておくれぬ親様は、仏様お一人じゃ」と手を合わせたのを隠れて聴いていた爺、「その一言で、よう土産になった」と喜んだ。老夫婦の情愛と人情の機微を盛り込んだ因縁談である。

後席は讃題が和歌であり、譬喩が三箇所配されている。冒頭の和歌を讃題と見なすと、法説が第二段に相当するので鶴膝格と分析できるであろうか。更に構成を観てみると、「沖の鷗」という「弁」の段が加えられている。本文を参照すると「沖の鷗に潮時間えば、わたしゃ立つ鳥、波に問え」というソーラン節の一節であった(上掲書142頁)。このように民謡までも取り込んでしまうというのが節談の柔軟さであるという証左になるであろう。また考え抜かれた構成を辿ってみると、説教者の工夫が偲ばれる。

3. 譬喩の重要性

前節で見たような五段構成のうち、説教者が格別の工夫をせねばならないのは譬喩と因縁である。讃題は經典等からの引用であるから、一席の主題としてどの句を用いるかが決まれば法説までは固まるであろう。この段は比較的容易であると言えよう。しかしながら譬喩と因縁は、

説教者の独創性が問われる。堅苦しい教義である讃題の考えを平易な言葉で置き直すために、どのような話題を譬喩または因縁として語るかは一席の説教全体が聴聞衆にどのように訴えかけるかという課題の鍵を握ると考えられる。

例えば神子上師（2016：3）が、半世紀以上前に高座説教をされた折に「十方諸有讃説教」から一席を選んで讃題とされたと述懐しておられる。その讃題は以下の通りである。

十方諸有の衆生は 阿弥陀至徳のみ名を聞き
眞実信心いたりなば おおきに所聞を慶喜せん

江戸時代文化年間から東保流節談の道場である獲麟寮が置かれた福専寺のご住職である神子上師ご自身も、東保流節談を習われるに当たって「入門者は先ずこの説教本を使って練習したものであります」と述べられている。

このように一席の説教全体において譬喩と因縁が重要であるという問題意識は、古くから共有されていたようである。むしろ説教が盛んであった時代の方が、そのような要請はもっと現実的で切実であったと考えられる。例えば四百年前、元和年間に編まれ寛永年間に上梓された安楽庵策伝和尚の『醒睡笑』がそうであった。名説教僧であった策伝和尚が、六十年間の説教で自身が語った譬喩、また耳にした小咄の類を千以上も集めて八巻本とした。策伝和尚は、その後落語へと発展していく小咄を譬喩として聴聞者を楽しませたことであろう。関山師（2001）が指摘されているように、策伝和尚は布教としての説教と語り芸としての落語という接点に位置するという意味で貴重な存在である。参考になるので、序文を引用してみる。

ころはいつ元和九癸戌の年、天下泰平人民豊楽の折から、某小僧の時より。耳にふれておもしろくおかしかりつる事を、反故の端にとめをきたり。是年七十にして柴の扉の明暮、心をやすむるひまひま、こしかたしるせし筆の跡をみれば、をのづから睡をさましてわらふ。さるまゝにや是を醒睡笑と名付、かたはらいたき草紙を、八巻となして残すのみ

「元和偃武」と謂われ、大坂冬の陣と夏の陣も終わって大きな争いはなくなった。世の中も落ち着いてきたので、というのが時代背景であろう。その頃も、説教中に居眠りをする聴聞衆が居たものと見えて、「睡りを醒ます笑い」という警句を書名に持ってきたのが和尚の頓知であろう。策伝和尚は浄土宗西山深草派誓願寺五十五世の法主を勤めた傑僧であり、その生涯は関山師（1990）に詳しい。

もう一点『醒睡笑』に集められた譬喩話に特徴的と考えられるのは、各話が短いということである。次に挙げるのは巻二「謂被謂物之由来」からで、仮に「風の子」と題しておく。僅かに一行である（現代語訳、86頁）。

わらんべは、風の子と。しるしらず。世にいふは。何事ぞ。夫婦のあひたの子なればなり

短いながらも、良くできた小咄である。現代風に語るとすれば、「子供は風の子というのは何故か、夫婦の子だから」というように運ぶであろうか。一口小咄のように作られている。「ふうふ」という音を風の音に当てている、一種の地口である。

これはまた極端に短い部類の小咄であるが、『醒睡笑』に収められた小話は長くとも五行ほどのものが大半である。策伝和尚の時代には、譬喩に用いる小咄はごく短いものであったのであろう。それを三つ、四つと立て続けに話したのではないかと想像される。それが時代と共に徐々に長くなったのではないだろうか。この点は、今後の研究課題として残しておく。

もう一話、引用しておく。巻二、「鈍副子」と題されたうちの一話である。

小性をおきて、心みに始て茶をひかする。事の外あらし。是はとしかりたる時、ちと座をしざり。それはまつあらびきで御座ると、さてさてをのれは日本に、またふたりともあるまひ、うつけやとあれば。又きつと手をつき、いや日本もひろふ御座る程に、御尋あらは、またも御ざらふと

「副子」とは、禅寺で都寺、監寺を補佐して出納を司る役であるが、「鈍」とは間が抜けた性格を意味している。冒頭の「小性」は「小姓」であるが、「日本一のうつけ者」と面罵されて「いいえ、日本も広うございますから、もう一人ぐらい居りましょう」と口答えしている。このように「鈍副子」は、寺方の逸話を集めた編である。一話がこれ位の長さであったから、説教では次から次へと面白い話を繰り出して聴聞衆を楽しませたことであろう。

江戸時代に説教が盛んになっていった様子は、例えば文化年間に播州揖保郡東保の福専寺に獲麟寮が開設されて説教者を養成していたことから窺われる。その後も説教者の要請に応ずるように、譬喩話を集めた本が多数出版された時期があった。大須賀師（2014：184）では、明治以降に千二百部を超える説教本が出版されたと記されている。例えば黒瀬師（2016／1916）の『大笑小笑』は百年前の譬喩集であるが、説教者が一般的に譬喩のネタを探すために編まれた一書と考えられる。今般復刻された同書は、府越師による現代訳と索引が付けられている。この現代版『大笑小笑』で上述の「十方諸有讃」に適する譬喩を探すとすれば、「求道心」という見出しで以下の譬喩が該当するであろう。便宜上、番号を付す。

- 一. 生ける世に捨ててたく身や うからまし ついに薪と 思はざりせば
- 二. 関山国師の求道
- 三. 道心の中に衣食あり 衣食の中に道心なし
- 四. 盤珪と大梁
- 五. 美顔を焼いて法を求める
- 六. 昔宮中に遊んで蘭閣を焼く（漢詩）

いずれも、譬喩と言いながらかなり長い話である。そのまま引用すると四百字を超えるような分量になってしまうので、概要だけを記すこととする。一・五・六は了然尼の話である。了然尼は武田信玄公の玄孫で、嫁して三子を産んだ後に従前からの希望通り出家しようとした。しかし美貌のために許しを得られず、ついに自ら熱した鍔を顔に当てて白翁師に再度頼んだ。ようやく入門を許されて詠んだのが六の七言絶句と一の和歌だという。仏道に対する了然尼の強い求道心を題材としている。聴聞衆にそこまでの求道心を求めることは不可能であろうが、「昔の人はこれぐらいの覚悟で仏道を求めたものであります」というように一般化して譬喩の一話とすることは可能であろう。

譬喩をこういうように選んだとすれば、次は因縁をどうするかというように説教の構成が進んでいくであろう。このように、五段構成を基本とする節談は極めて合理的に一席の組み立てができるようになっている。

4. 因縁談の題材

この節では、譬喩に続いて説教の構成要素である因縁について考察してみたい。この節においては便宜的に「因縁談」という呼称も用いることとするが、これは特定の題材ではなしに全般的に因縁として語られるものを指している。

譬喩が比較的短い題材でもって讃題で説かれた教義を身近に引き寄せる段であるとするれば、因縁はもう少し長い構成である。本稿で立てる仮説として、『石山軍記』や『親鸞聖人御一代記』など続き読みにされる長いものは因縁談の延長であるというふうに考えられると提唱したい。『石山軍記』は全十五段という長さで、雑誌『節談説教』第十六号（2016年三月発行）から連載が始まっている。これは、本願寺第十一世顕如上人の折、大坂石山本願寺において十年の長きに亘って織田軍と合戦を繰り返した様子を細かく語るものである。後に講談に発展していく「太平記読み」と、どちらが先行したのかという比較は今後の課題として残しておく。

次に『親鸞聖人御一代記』であるが、西川諦亮師述の文が明治三十九年に上下二巻四十四章立てで法蔵館から出版されている。波乱に富んだ生涯の御一代記であるから、続き読みをするとしたら一週間連続というような分量であろうと想像される。現在は以下のホームページで公開されている。

<http://seiten.icho.gr.jp/pdf/01howa.pdf>

やや短いものとしては、『大原問答』を挙げることができよう。これは法然上人が比叡山や南都の僧ら三百八十有余人を相手に廻して、洛北大原の勝林院において教義の問答を行った一部始終を扱っている。今は前後二席に分けて語られることが多いであろうが、嘗ては十席以上で教義などを細かく論じたそうである。

これら長尺の因縁談は、講談（講釈）との関連が考えられる。関山師（2001）が指摘しておられるように、説教は落語や講談など語り芸の源流である。講談には『元禄快挙録 義士銘々伝』、落語には『牡丹灯籠』のように「続き読み」をする長尺ものという伝統がある。『義士銘々伝』では、四十七士の一人ずつについて細かく語っていけば一年の続き読みもありうるといふ。興行としては、一人の語り手が何日にも亘って語り続ける必要がある。説教においても『親鸞聖人御一代記』や『石山軍記』のような長尺ものも、何十年か前では五日なり一週間の連続ならば続き読みが可能であったろう。しかしそのような連続高座がなくなったと考えられる現代においては、続き読みは実現が難しい企画であろうか。

このような因縁談の原型は、古く経典にも見いだすことができよう。例えば『仏説観無量寿経』前半で、息子である阿闍世王子に幽閉された頻婆沙羅王を韋提希夫人が助けるという物語が配されている。これは浄土三部経中で最も波乱に富んだ事件であり、因縁談として格好の題材であると思われる。そして釈尊が韋提希夫人に日観に始まる十三観法と、上品上生から下品下生までの九段階の信心を説くのが観経の後半である。前半は物語性に富んだ因縁談、後半は観法という修行の過程と信心の段階を示した観経の構成は非常に巧みである。

ここでは『妙法蓮華経』「信解品第四」の「長者窮子の譬喩」を採ってみる。「譬喩」と題さ

れてはいるが、長い物語である。因縁談として扱って差し支えなからう。長くなるが全体を引用する (<http://blog.saiho-ji.org/wp/2016/08/07/>)。

譬えば人あって、年すでに幼稚にして父を捨てて逃逝し、久しく他国に住して、あるいは十・二十より五十歳に至る。年すでに長大してますますまた窮困し、四方に馳騁して以て衣食を求め、漸漸に遊行して本国に遇い向かぬ。

その父先よりこのかた、子を求むるに得ずして一城に中止す。その家大いに富んで財宝無量なり。時に貧窮の子、諸の聚落に遊び国邑に経歴して、遂にその父の所止の城に到りぬ。父つねに子を念う。子と離別して五十余年（中略）みずから念わく、「老朽して多く財物あり。金・銀・珍宝、倉庫に盈溢すれども、子息あることなし。一旦に終没しなば、財物散失して委付する所なけん」ここを以て慇懃につねにその子を憶う。

その時に窮子、傭賃展転して父の舎に遇い到りぬ。門の側に住立してはるかにその父を見れば、師子の牀に踞して宝几足を承け、（中略）かくの如き等の種種の嚴飾あって威徳特尊なり。窮子父の大力勢あるを見て、すなわち恐怖を懷いて、ここに來至せることを悔ゆ。

「もし久しくここに住せば、あるいは逼迫せられ強いて我をして作さしめん」この念を作し已って、疾く走って去りぬ。時に富める長者師子の座において、子を見てすなわち識りぬ。（中略）すなわち傍人を遣わして、急に追うて將いて還らしむ。（中略）時に窮子みずから念わく、「罪なくして囚執えらる、これ必定して死せん」。転たさらに惶怖し、悶絶して地に踞る。父はるかにこれを見て使いに語って言わく、「（中略）冷水を以て面に灑いで醒悟することを得せしめよ」。（中略）使者これに語らく、「我今汝を放す、意の所趣に随え」。窮子歡喜して未曾有なることを得て、地より起きて貧里に往至して、以て衣食を求む。

その時に長者、將にその子を誘引せんと欲して、方便を設けて、密かに二人の形色憔悴して威徳なき者を遣わす。汝彼を詣いてようやく窮子に語るべし、「ここに作処あり。倍して汝に値を与えん」（中略）もし「何の所作をか欲す」と言わばすなわちこれに語るべし。「汝を雇うことは糞を除わしめんとなり」（中略）その時に窮子まずその値を取って、尋いでともに糞を除う。

その父、子を見て慇懃でこれを怪しむ。また他日を以て窓牖の中より、はるかに子の身を見れば、羸瘦憔悴し、糞土塵坌汗穢不淨なり。すなわち瓔珞・細軟の上服・嚴飾の具を脱いで、さらに羸弊垢膩の衣を著、塵土に身を塗し、右の手に除糞の器を執持して、畏るる所あるに状れり。諸の作人の語らく、「汝等動作して懈怠することを得ること勿れ」と。方便を以ての故にその子に近づくことを得つ。後にまた告げて言わく、（中略）「我汝が父の如し、また憂慮することなかれ。（中略）今より已後、所生の子の如くせん」（中略）その時に窮子この遇を欣ぶといえども、なおみずから客作の賤し人と謂えり。これに由るが故に、二十年の中において常に糞を除わしむ。

これを過ぎて已後、心相体信して入出に難りなし。しかもその所止はなお本処に在り。世尊、その時に長者疾有って、みずから將に死せんこと久しからじと知って、窮子に語って言わく、「我今多く金・銀・珍宝有って倉庫に盈溢せり。その中の多少、取与すべき所、汝ことごとくこれを知れ」（中略）また少時を経て、父、子の意漸く已に通泰して、大志を成就し、みずから先の心を鄙んずと知って、終わらんと欲する時に臨んで、その子に命じ、ならびに親族・国王・大臣・刹利・居士を会むるに皆ことごとく已に集まりぬ。すなわちみずから宣言すらく、

「諸君まさに知るべし、これはこれ我が子なり、(中略) 今吾が所有の一切の財物は皆これ子の有なり」(中略) この時に窮子、父のこの言を聞いてすなわち大いに歓喜して、未曾有なることを得て、この念を作さく、「我本心に怖具する所あることなかりき。今この宝蔵、自然にして至りぬといわんが如し」

この長大な物語で、父子の情愛を細かく描いている。長者が困窮した我が子に親子の名乗りをしたいところをぐっと堪えて、二十年もの時間をかけるというこの物語に伏せられている教えは、意味深長である。この因縁談では、父を釈尊に、子を民に喩えている。父が教えを受けようとしても、民が畏れて近付かないようでは功がない。父たる釈尊は辛抱強く機会を待ち、相手の様子をよく観察しながら感化するという教えである(対機説法)。皮肉なことに、父が子に親切にしても子は警戒して心を許さない。これは、有り難い教えであっても民に信心がなければ受け入れないことの譬えであろう。しかし結末は皆が幸せになるように組み立てられており、予定調和の世界である。

このように『観無量寿経』や『法華経』「長者窮子の譬喩」に見られる物語は譬喩に富み、拡がりを持っている。法要などの場で經典を漢文訓読しているだけでは、筋を辿ってこのような物語世界に触れることはできない。『観無量寿経』の漢文音読を耳にしている、韋提希夫人の物語が展開しているとは事前に知っていない限り不可能である。しかし説教では、譬喩や因縁において分かり易い言葉で語りかけることができる。もしも説教でこのような物語が語られたならば、聴聞する門徒衆は乾いた砂が水を吸収する如くに教義を身近に学び取ったことであろう。

5. 結 び

ここまで、節談の構成について言語学的な分析を試みた。節談は「伝統的な説教」として、聴聞衆の情に訴えかける側面が強調されることが多いという印象があるが、こうして検証してみると全体が極めて論理的に構成されていることがわかる。節談と謂えば五段法による構成を連想するが、『節談の秘訣』によれば三分式や四部式という形態も併存していることが明らかにされている。

次に、讃題と法説は經典や祖録から抽出するので説教者の学びによるが、譬喩と因縁は説教者の創意によって練り上げられるものであると指摘した。これまでに出版された数多の説教本は讃題の選び方についても示唆しているであろうが、多くは譬喩や因縁の材料を提供することが主眼であるように思われる。『説教の秘訣』巻末には武藤幸久氏が集められた説教本の一覧が付されているが、どのような題材が説教で扱われてきたかという傾向を書名から窺うことができる。

また、『親鸞聖人御一代記』『石山戦記』というような続き読みをされる長尺ものは、因縁に相当する部分が長くなっていったと考えられることを示した。これは上述の「譬喩と因縁は説教者の経験に基づく」という原則と矛盾するようにも思われる。しかしながら、原則とはあくまで一つの基準である。太平記読みのような続き読みの物語という構成を考察してみると、五段法の中では因縁に相当すると考えるのが妥当だという分析をここで示しているのである。ここで太平記読みを引き合いに出したが、後に講談・講釈に発展するこの語り芸と『親鸞聖人御

一代記』や『石山戦記』との関連も歴史的観点から興味深いところである。これも今後の課題としておく。

最後に『説教の秘訣』に収録されている口伝を紹介しておこう。これは文字通り説教を語る際の助言と考えられる。ここでも便宜的に番号を振っておく。

- 一、説教は田楽を作るが如くせよ 安心の豆腐に教学の串を打ち 譬喩因縁の味噌を付け 弁舌の火で炙り 教学の串を抜いて食べさせよ
- 二、讃題に ついて離れて またついて 花の盛りに 置くぞよろしき
- 三、始めしんみり 中おかしく 終わり尊く
- 四、聞け書け語れ 座を重ね 人に聞かせて 癖をなおせよ

いずれも師から弟子へと伝えられてきた、実践的な教えである。一は台本を書くに当たったの注意点を、田楽に則して並べた愉快な助言である。この小論でも見てきたように、説教というのは教義を伝えるものであって、元来が論理的に組み立てられている。しかし堅苦しいばかりでは門徒の心に届かないので「教学の串を抜いて食べさせよ」と戒めているのであろう。譬喩因縁で身近な例を引いて、讃題で説いた教義を分かりやすく伝えるという内容を面白く伝えている。

二は、一席の構成全体について示唆している。讃題は全体の中心であるから、法説では細かく説明をする。譬喩と因縁は違う話題に振るように思われても、讃題と法説から一貫した流れになっている必要がある。つまり、讃題で説かれている教義に適うような題材でなければならない。そして結勧でもう一度讃題の教えを繰り返す。セリ弁を入れるとすれば、座が盛り上がったところでサッと切り上げるのが最善と示している。

三は、語り口について技術的な指導である。讃題に入っても聴聞衆がざわざわしているようであれば、わざと声を落として注意を喚起する。譬喩と因縁になれば、気軽に笑えるような譬え話を入れて気分をほぐす。そして結勧はまた荘重な調子で締め括る、という語り口の変化を説いているのである。讃題は節を付けるし、結勧にセリ弁を入れるとすれば、譬喩と因縁は普通の話し言葉で節を付けない。そのような語り口の違いも織り込んでいるのである。

四は、座数を踏むという経験が物を言うという教訓である。一と同じく、命令口調である。説教者として上達の極意を手短に伝えている。

今後の課題としては、説教が歴史的にどのような変化を経てきたのかという通時的な側面を挙げるができる。策伝和尚時代の譬喩を集めたと考えられる『醒睡笑』は、ごくごく短い小咄が主体であった。而るに『大笑小笑』に見られるような現代の譬喩は、かなり長くなっている。短い一口話のような小咄が始まりで、徐々に譬喩として長くなっていった——というような通時の変化が明らかになれば、節談研究にとって興味深いであろう。

参考文献

- 安楽庵策伝（2014）『醒睡笑』（訳注、宮尾與男）東京：講談社。
大須賀順意（2014／1910）『説教の秘訣』（府越義博編訳、増補版）東京：国書刊行会。
柏原祐義（編）（1935）『真宗聖典』京都：法蔵館。

- 角岡賢一（2016）「節談説教の文化史的研究」『龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報』第25巻。pp. 103-116。
- 黒瀬知圓（2016／1916）『現代文 大笑小笑 説教譬喩集』東京：国書刊行会。
- 釈徹宗（2010）『おてらくご 落語の中の浄土真宗』京都：本願寺出版社。
- 釈徹宗（2013）「隘路を行く者」『節談説教』第十一号。
- 関山和夫（1990）『安楽庵策伝和尚の生涯』京都：法蔵館。
- 関山和夫（2001）『庶民芸能と仏教』東京：大蔵出版。
- 祖父江省念（2014／1985）『節談説教七十年』京都：方丈堂。
- 谷口幸璽（2004）『「節談」はよみがえる』京都：白馬社。
- 直林不退（2010）「説教の歴史と節談」『節談説教』第五号。
- 直林不退（2014）『名人木村微量の承継者 神田唯憲の節談』八王子：節談説教研究会。
- 府越義博（2010）「説教台本作成法」『節談説教』第六号、37～49頁。
- 神子上恵群（2016）「獲麟に臨む時」『節談説教』第十七号、2～6頁。

註

-
- *1 直林師（2014：37）では「結弁（結勸）」と表記されている。
- *2 原著では神田唯憲師の布教日誌に残された番号が附され、師である木村微量師の『信疑決判』を参照している旨も言及されている。ここでは、その番号等を省略する。